

### Ⅲ. ゼミ単位取得論文

#### 論文題目

「オーギュスト・ワルラスの社会的富の理論について」

京都大学経済学部

入学年 2001年入学

学生番号 0400-13-1916

氏名 松岡 孝恭

提出年 2004年11月

## 目次

### はじめに

#### 第1節 事物を媒介とした社会的関係

- (1) 経済学からみた人間と事物の関係
- (2) 所有の理論からみた人間と事物の関係

#### 第2節 効用と交換価値

#### 第3節 効用の可測性について

#### 第4節 進歩する社会における収入の特殊法則

- (1) 資本と収入
- (2) 社会的富の三要素
- (3) 収入の変動法則

#### 第5節 オーギュスト・ワルラスの所有論

- (1) 土地国有化論について
- (2) 経済学と道德の関係

### 参考文献

## はじめに

オーギュスト・ワルラス（1801 - 1866）は一般均衡理論の創始者として名高いレオン・ワルラス（1834 - 1910）の父である。本稿で取り上げる『社会的富の理論—経済学の基本原則の要約』（1849）は、彼の20年にもわたる経済学と所有論についての研究成果である。

まず、『社会的富の理論』の成立事情について述べておきたい。オーギュスト・ワルラスは、自らの経済学と所有論の研究を8章にまとめて発表するつもりでいた。<sup>1</sup>『社会的富の理論』はオーギュストの主張の要である土地国有化論に向かって一貫した論理で進んでいく。オーギュストはその主張が含まれる所有論を最後の二章で述べるつもりで書き、そして完成していたのであるが、その部分は公刊されずに草稿だけが残されている。テキスト・クリティークの成果によれば、手稿として残されている所有論の二つの章に、息子レオン・ワルラスの手によって「社会的富の理論第7章」、「社会的富の理論第8章」という書き込みがあるという。当時の社会情勢からすれば、あまりに過激な内容だったため、オーギュストは所有論を展開した二章の出版を取りやめたのである。

この論文を書くに当たって参照した佐藤茂行訳の『社会的富の理論』には、未刊となった所有論二章が訳出されている。それは付録として第6章のあとに置かれ、当初の構想をそのまま再現する体裁となっている。本稿ではこの未刊の所有論も含めて、オーギュスト・ワルラスが創造した経済学と所有論の全体を捉えることを目的とする。

---

<sup>1</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原則の要約』佐藤茂行訳、北海道大学経済学部、1995年、93ページ、（訳者解題、以下「解題」と記す）。

## 第1節 事物を媒介とした社会的関係

### (1) 経済学からみた人間と事物の関係

およそ学問には固有の対象領域と方法論がある。学問の対象が成立するためには、われわれを取り巻く森羅万象からその学問にとって重要と考えられる対象の属性を、固有の方法論にしたがって見つけなければならない。ある一つの属性を取り出すことによって、未分化の状態にある世界に最初の領域が生じ、学問的な分析が始まる。

人間と外界の事物との間にいかなる関係があるか、経済学の対象としてどのような関係が重要なのだろうか。第1節ではオーギュスト・ワルラスがどのように人間をとらえ、事物との関係をどう経済学の体系に織り込んだのかを見ていく。

オーギュストの体系の中で、一人の人間はどのように考えられているのであろうか。第1章は次のような印象的な書き出しで始まる。

人間は感覺的存在としてみれば、生まれてから死ぬまで欲求と呼ばれる一連の肉体的、知的、道徳的現象に支配されている。かれは、空腹になり喉が渇くと、食べたい、飲みたいという欲求をもつ。彼は無知であるがゆえに知りたいと思う。彼は一人ぼっちであり、その孤独から不安になり、同胞と交わりたいという欲求をもつ。<sup>2</sup>

ここでオーギュストが取り出してきた人間の属性は、人間の感覺的側面である。人間を構成する数多くの属性のうち、学問の体系に必要と思われる属性を考えた結果、オーギュストは「感覺的存在」という属性に注目することになったのである。感覺的存在としての人間は、生まれてから死ぬまで「欲求」という現象に支配される。この現象には肉体的、知的、道徳的という三つの側面があつて、感覺的存在である限りこれらの現象にわれわれは服従しなければならない。

しかしその服従に対する「代償」として、われわれには自然から提供された「材料」、人間に備わる「能力」、それから同胞に対する「気遣いや協力」がそれぞれ正当に与えられている。<sup>3</sup>これら三つの代償は、肉体的、知的、道徳的という欲求の三つの属性に対応している。

ここに経済学が注目すべき、人間と外界の事物との関係が成立する。この関係を正確に言えば、一方は感覺的存在としての人間の欲求、もう一方はそれに対応した代償となる外界の事物である。では、この二項をつなぐ関係自体はどのようにとらえられるのだろうか。

---

<sup>2</sup> 同上書、1 ページ。

<sup>3</sup> 同上書、1 ページ。

オーギュストの言葉によれば、この関係こそ「効用」に他ならない。

経済学を研究するとき、効用という言葉は広い意味で理解しなければならない。周知のように、効用とは何らかの欲求を満足させる力能、または、どのような享樂であれ、それを獲得させる力能のことである。<sup>4</sup>

欲求を満足させる「力能」をもつもの、すなわち先に述べた代償としての性格をもつ事物を、オーギュストは「有用なもの」と呼ぶ。逆にいえば、この力能は「有用なもの」に内在する一つの属性である。われわれはさまざまな欲求に支配され、その欲求を満たそうとして日々活動しているのであるが、「有用なもの」を求めるときはこの力能を求めているのである。

ここで注意すべきことは、こうした人間と外界の事物の関係には何ら社会が含意されていないことである。一人の人間が何らかの力能を期待して外界の事物を求めるという状況は、もう一人の、あるいはそれ以上の数の人間を想定しなくても考えることができる。

では、この一人の人間と事物との二項関係に、もう一人あるいはそれ以上の人間を組み込んで、社会的関係へと拡張するにはどうすればよいのだろうか。オーギュストの言葉によれば、外界の事物に加わる「量的制限」によって拡張される。<sup>5</sup>量的な制限のある有用なものは、「希少なもの」である。言い換えれば、「希少性」の概念は、「有用性」と「量的制限」とから成っている。

事物が量的制限を受けるとは、すべての人間の欲求を満足するほど事物が豊富に存在しないということを意味する。一方、量的制限の加わらないものとして、オーギュストは呼吸できる空気、陽光、公共用水、重力、電磁力といった、人間の欲望によって使い尽くされないものを想定している。このことから、外界の事物の多くが量的制限の範疇に入ることがわかるであろう。

しかし、一方で「量的制限」は有用なものからその力能を得ようと思っている多くの人間の欲求を必ずしも満たさないということでもある。まさにここにおいて、社会的な含意が個人と事物との二項関係に入ることになる。事物に量的制限が加わることによって二項関係がそれ自体で閉じることなく、その関係が社会的な意味合いを帯びはじめるのである。

## (2) 所有の理論からみた人間と事物の関係

おなじ二項関係をオーギュストは、有用なものを持つという「占有」の観点からも考える。有用なものが持つ力能を享受して欲求を満たすためには、前もってそれを占有してい

---

<sup>4</sup> 同上書、1 ページ。

<sup>5</sup> 同上書、5 ページ。

なければならない。人間はさまざまな欲求が生じたときいつでも確実にそれを満足させるということを求める。それゆえ占有は消費の欲望に先立つという。

かれを喜ばせるものが消費されるにしても、それは、それを占有した後である。消費の欲求から占有の願望が生じ、消費の手段についての安心と信頼への欲求から保持の欲求が生じる。占有の基礎つまり消費の基礎をなす願望によって、人間の勤労と活動が生み出され、次いで、蓄積または貯蓄が生み出される。賢明で慎重な人間であるなら、望みうるあらゆるものを手に入れようと探し求めて、ある何らかのものを占有したとき、それをできるだけ長く保持しようと努める。将来欲求が生じたときに無一文でないこと、そして、その欲求を満足させる手段をもつことが保証されるために、現在の欲求が抑制される。<sup>6</sup>

しかし、ある有用なものを占有する人間は、将来の消費のためにそれを占有し続けることも、あるいはそれを手放して価値をもった他のある対象と交換することもできる。つまり、ある人間が占有している有用なものは、量的制限の下では、別の人間の欲求をも満たしうる可能性、すなわち「交換価値」をもっているのである。それゆえ、有用なものは私的に所有されるだけの単なる「富」という性格を失う。したがって、オーギュストは「有用性」と「量的制限」であるところの占有の概念を、「社会的富」と名づける。

人間と事物との二項関係は、量的制限を加えることによって人間と事物と、さらにもう一人の人間とからなる社会的関係に拡張される。事物の力能と人間の欲求との観点から社会的関係が構築できることはすでに述べた通りである。また人間と事物の関係を占有の観点から考えても、生じてくるのは同じ社会的関係である。人間と事物との関係を、効用と交換価値という観点で考えるのが経済学であり、同じ関係を占有の観点から考えるのが所有の理論である。ここにおいて、経済学と所有の理論が密接な関係を持つことになる。オーギュストは次のように述べている。

いまこそ、経済学が、なぜ所有の研究にとって非常に大きな助けになるかが判明する。この二つの科学を緊密に結び付けている共通点は何であるかが判明する。この共通点こそ、実は、これら二つの科学の対象の同一性そのものに他ならない。社会的富を形づくるものは同じく所有物を形づくるし、所有物を形づくるものは同じく社会的富を形づくる。所有の理論と社会的富の理論とは、まさに同一のものを対象としているのである。<sup>7</sup>

「社会的富」は希少なものであるがゆえに、商業あるいは取引の対象であり、「交換価値」

---

<sup>6</sup> 同上書、28 ページ。

<sup>7</sup> 同上書、6 ページ。

をもつものである。また「社会的富」は所有されうるものであるがゆえに、所有権の媒介的対象となる。これらの相違は観点の違いによるものであって、対象としているのは同量的に制限された有用なものなのである。

所有の理論については第5節で述べることにして、次節では経済学が扱う希少性の概念、それから効用と交換価値の区別について詳しくみていきたい。

## 第2節 効用と交換価値

希少性は社会的富の概念の一つであり、その名が示すとおり希少性の概念は社会を含意するものである。同じ概念のレベルで希少性は交換価値に置き換えることができる。本節で後に示すが、希少性の程度が交換価値の大小を決定するのである。一方、効用は感覺的存在としての人間を満足させる、事物に内在する力能のことである。この力能と人間の欲求との関係が経済学的に重要となるのであるが、この関係には社会的な含意が入らないのであった。

オーギュストは、多くの経済学者が交換価値と効用の二つの概念を混同していることに気づき、それらに明確な区別を設けるべきだと主張する。

経済学の真の対象、それは社会的富である。だが、この[社会的富の]現象の本質を把握するのは必ずしも容易ではない。経済学者たちは、私が今指摘した富の二つの側面をしばしば混同してきた。彼らは効用と交換価値との間に境界線を引くことを知らなかったのである。<sup>8</sup>

では、効用と交換価値との違いはどのようなものか。そのひとつである社会的な含意の有無については前節で述べたので、それ以外の違いについてここで取り上げたい。先に簡単にまとめるならば、二点になる。第一に、効用は絶対的で普遍的な富の成立条件であって、それ自体好ましいものである。一方、交換価値は相対的で変化する富を構成するものであって、それ自体は相対的なひとつの利益に過ぎないものである。第二に、効用は秤量しうる大きさではないが、交換価値は精確かつ厳密な方法で測りうる大きさである。第二の点については、第3節で取り上げることにしたい。

効用が絶対的で、普遍的な富の成立条件であるという点について、オーギュストは次のような例を与えている。

一袋の小麦によって一定期間、一定数の人間が常に養われうるであろう。また、ある与えられた大きさの家によって、同じ人数もしくは同じ家族が常に雨露をしのぐことができるであろう。同じ背丈を保ち、また、同じ形と大きさの衣服を作る限り、一定の長さのラシャは一着の上着または外套を作るのに常に役立つであろう。一定量の金または銀は常にある一定の寸法を持った壺、盃、あるいはその他のあらゆる器具を製造するのに役立つであろう。<sup>9</sup>

---

<sup>8</sup> 同上書、6 ページ。

<sup>9</sup> 同上書、7 ページ。



ここからわかることは、人間の欲求を満たす力能が事物に内在するということである。一袋の小麦は物理的に変化しなければ、その小麦が持つ力能は同一であり、一定である。また同じの衣服を作る限り、一定の長さのラシャがもつ力能は変化しない。効用とは感覚的存在としての人間の欲求を満たす力能のことであった。オーギュストが効用を絶対的な富の条件と言うのは、この意味においてである。

一方、比較対象である交換価値についてみてみよう。以下の部分がオーギュストの考えた、交換価値の変動を決める「希少性の程度」である。

常に同じ効用を持つ同一の品物であっても、あるときはより大きい、あるときはより小さい交換価値をもちうる。ある品物の価格は、その数量すなわち時と場所に応じて本質的に変化する数量そのものと、その数量に劣らず変化に富む、その占有を促す欲求の量との両者に依存している。このことから、ある交換価値の所有者は、彼の周りにこれと同じ品物を持たず、しかもそれを占有したいという思いに駆られている人間が多いか少ないか、また、市場におけるこれと同じ品物の供給が多いか少ないかによって、より豊かになったり貧しくなったりするであろう。<sup>10</sup>

交換価値の所有者は占有したいという思いに駆られている人間の数が多いか少ないかによって、豊かになったり、貧しくなったりするという。このような希少性の程度のとらえ方から、人間の欲求についてオーギュストは次のように考えていることがわかる。

それは人間の欲求を二値的なものととらえているということである。つまり、オーギュストは人間がある事物を欲するか欲しないかを問題としていて、その欲望の強さを問題としていない。社会的な含意をもつ交換価値は、一人の人間が全か無の欲求を持つと仮定しても、社会に存在する欲求をもった人間の数に応じて変化するのである。

そして交換価値は、ほかの商品と比較した場合に意味をもちうる相対的な価値である。

すなわち、各々の種類の商品または生産物について、商品毎に変化する希少性の一定の度合いがある。そのために、各々の種類の商品または生産物について、他の各々の商品または生産物の価値と異なる価値の一定の度合いがある。だから、そこには各商品の相対的価値とでもいうべきもの、つまり他のあらゆる商品の価値と関連した、固有の特殊な価値がある、ということである。<sup>11</sup>

さて、このような効用と交換価値の関係から、一つの応用がなされる。オーギュストは貴金属を例にとり、有用なものの中でも貴金属の属性に特別な意味を見出している。オー

---

<sup>10</sup> 同上書、7 ページ。

<sup>11</sup> 同上書、16 ページ。

ギュストによれば、貴金属はわれわれの欲求の中でもとりわけ奢侈にかかわる欲求を満たすものである。この事実はいかなる時代や地域にもあてはまることから、「普遍的有用性」を持つという。<sup>12)</sup>ほかにも貴金属には、産地によらず品質が同じであるという意味での「同一性」、「不可滅性」、「携帯可能性」などの属性がある。

なかでもユニークなのが「無限分割可能性」と価値の「安定性」である。前者は金属を高温で溶かせば原理的にいかなる容量の塊を作ることが可能であることを意味する。それゆえある有用なものには、かならずその価値に対応する貴金属の塊が存在する。後者は上に挙げた属性から自然と導かれる。貴金属もまた相対的価値をもっており、それらは鉄や小麦などの他の商品と関連している。その意味で貴金属は他の商品と異なるところはないのであるが、価格の安定性にかんしては経験的にほかの有用なものよりも優れているという。こうした属性を見出したオーギュストは貴金属を交換価値の測定単位すなわち、ニュメラルとして位置付けるのである。

価値を測定したり、その変化に気付くことの難しさは、測定単位を測定したり、何らかの普遍性を持った比較標識の把握に際して感じる難しさから生じるのは明らかである。仮にこの比較標識が存在しないとしたら、価値を測定する目論見は非現実な企てになることは確実である。幸いなことにこの比較標識は存在している。それを示すものが貴金属なのである。たしかに貴金属の価値は絶対かつ厳密に不変ではない。だが、少なくとも、この価値は他の商品の価値と同じように変化しやすいということはない。すべての価値を特徴付けている絶えざる不安定さの中であって、貴金属は一定の不変性を示す唯一の商品なのである。仮に、それらの価値が変動するとしても、その変動は他の商品のそれに比べてはるかに小さいし、その変動要因もはるかに小さい。<sup>13)</sup>

---

<sup>12)</sup> 同上書、15 ページ。

<sup>13)</sup> 同上書、15 ページ。

### 第3節 効用の可測性について

この節では、効用と交換価値の可測性問題について述べたい。第2節の内容によれば、オーギュストは人間の欲求を二値的にとらえていて、事物に対する人間の態度はそれを欲するか欲しないかのいずれかである。しかし、外界の事物は一様ではない。事物 A が持つ力能（効用）と事物 B が持つ力能（効用）との関係はどう把握されるのか、関係を考えること自体に意味があるのか、オーギュストは次のように言う。

たしかに効用には大小がある。したがって、ある対象は他のものよりも有用であるという言い方ができるであろう。（…）だが、いかなる場合でもある何らかの対象が他のある対象よりも精確に2倍、3倍、4倍だけ有用であるとはいえないであろう。<sup>14</sup>

このような効用の見方は、現代的に言えば序数的効用可測主義である。<sup>15</sup>つまり効用の数値自体を測ることはできないが、二つの効用間の大小関係だけは決定できるという考え方である。一方で交換価値については次のように言う。

交換価値は測定しうる事実である。それは精確かつ厳密な方法によって測りうる大きさである。線分、角または面積が比較されるのと同様、諸価値が交互に比較されることを知らない者は、だれ一人いないであろう。ある対象が他のものの2倍、3倍、10倍に値しうるということは、確定的事項である。<sup>16</sup>

この交換価値の可測性からオーギュスト・ワルラスは経済が精密科学に導かれていくという。この延長に、息子レオン・ワルラスが純粋経済学という厳密な数理経済学の体系を築くのである。

オーギュストはレオンに経済学研究の道を薦めた。父の薦めで経済学を学び始めたレオン・ワルラスは、ライフワークの選択だけでなく、経済理論においても父親から決定的な影響を受けている。<sup>17</sup>レオンが生前、満足のいく形で完成しえた主著は『純粋経済学要論—社会的富の理論』であるが、「経済学の真の対象は社会的富である」という構想を得ていた父親の影響がその副題に象徴的に現れているように思う。事実、この『純粋経済学要論』の中でレオンは社会的富を次のように説明する。

<sup>14</sup> 同上書、11 ページ。

<sup>15</sup> 都留重人編『岩波経済学小事典』第3版、岩波書店、1999年、103 ページ。

<sup>16</sup> 前掲書、11 ページ。

<sup>17</sup> 御崎加代子『ワルラスの経済思想』名古屋大学出版会、1998年、17 ページ。

物質的または非物質的なもの（ものが物質的であるか非物質的であるかはここでは問題ではない）であって希少なもの、すなわち一方においてわれわれにとって効用があり、他方において限られた量しか獲得できないもののすべてを社会的富と呼ぶ。<sup>18</sup>

また希少性の概念を構成する量的制限については、次のように書いている。

われわれの各々があるものに対して持っている欲望を完全に満足させるために自由に獲得できるほどの量が存在しないとき、このものはわれわれが処分しうる量が限られた量しか存在しないという。世には、まったく存在しない場合を除けば、無限量を処分できるようないくつかの効用が存在する。たとえば大気、太陽が昇っているときの太陽の光線と熱、湖や河川の岸辺の水、はなにびとにも不足のない程度に存在し、なにびとにも欲するままの量を採ることができる。これらのものは効用を有するが、一般に希少ではなく、社会的富の一部をなさない。<sup>19</sup>

これらは第1節でみてきたオーギュストの概念と何ら変わることがない。

レオン・ワルラスにとって純粋経済学は「本質的には絶対的自由競争という仮説的な制度の下における価格決定の理論」<sup>20</sup>であり、『純粋経済学要論』の内容は「任意の数の商品の相互間の交換の場合における市場価格決定の問題の数学的解法および供給と需要の法則の科学的方式である」<sup>21</sup>と要約されている。

レオンは父オーギュストの概念をもとに価格の決定、需要と供給の法則を数学的に導出しようとした。その導出を見る前に、いま一度オーギュストが交換価値の可測性をどのようにとらえていたかを振り返っておきたい。オーギュストの体系では、交換価値の変動を説明するのは希少性の程度であって、その程度は社会に存在する有用なものの量と、それに対して欲求を持つ人間の数との関係によって決まるのであった。

しかし、このような決定の仕方には欠点があるといわねばならない。<sup>22</sup>

それはオーギュストの量的制限という概念を、具体的な数量として与えることが困難なことである。オーギュストのいう交換価値は直接的に価格を説明するものであるが、そのように説明される価格は観念的なものである。つまり、欲望を二値的にとらえ、その強度を問題にしないがゆえに、個人が、あるいはその総体としての社会がある価格の下でどれ

---

<sup>18</sup> レオン・ワルラス『純粋経済学要論—社会的富の理論』久武雅夫訳、岩波書店、1983年、21ページ。

<sup>19</sup> 同上書、22ページ。

<sup>20</sup> 同上書、第4版への序文、xページ。

<sup>21</sup> 同上書、viページ。

<sup>22</sup> 以下の議論は、次にしたがう。松嶋敦茂「オーギュスト・ワルラスの経済学」『彦根論叢』滋賀大学経済学部、1972年、155。

だけ有用なものを欲しているかを数量化できないのである。要するにオーギュストの体系では、現実の価格と欲求との対応関係についての説明がない。

レオンが『純粋経済学要論』で取り組んだのは、まさにこの点であった。

レオン・ワルラスは価格決定の理論、具体的にいえば需要曲線を構築するために、オーギュストの希少性概念のうち需要に関わる部分を「外延効用」として再定義する。外延効用とは、「価格がゼロであるときに有効に需要する量、すなわちこの商品が無償で与えられるときにこの人によって消費される量」<sup>23</sup>である。レオンの体系においては、単位が有用なものを求める人間の数ではなく、一人の人間が求めようとする財貨の数量となっていることに注意されたい。幾何学的に言えば、外延効用は需要曲線と数量軸との切片であって、切片の値がそのまま外延効用の値となる。

需要曲線はこれだけでは決定できない。曲線の傾きを考えるためにレオンは「強度効用」という人間の欲求の強さ、その緊急さを示す概念を導入する。欲求の強さ、緊急さについてはオーギュスト・ワルラスの『社会的富の理論』にも言及がある。交換価値について説明される箇所で、オーギュストは次のように書いている。

この価値の大きさは欲求の緊急度ではなく、欲求を感じる人間の数に比例する。たしかにもっとも緊急な欲求は、一般にもっとも数が多いということはいえるが。<sup>24</sup>

つまり、オーギュストの体系では欲望の強度は交換価値に影響を与えないものとして限定的な扱いがされているのである。一方、次に示すレオン・ワルラスの『純粋経済学要論』からの引用は、レオンがオーギュストを乗り越えた決定的瞬間である。

外延効用は効用のすべてではなく、その一つの要因にすぎない。(…) 曲線の勾配とは、つぎの二つの量すなわち価格の増加とこの増加によって惹き起こされる需要の減少との比に他ならない。この比は一般に何に依存するのであろうか。それは、われわれが強度効用と名付ける、商品の他の種類の効用に依存する。なぜならば、この効用はこの種の富によって満足される欲望が強いか弱いか緊急であるかそうでないかを表すものであり、それは価格が上がったのにもかかわらず欲望をもちつづける人の多少とその各人における欲望の持続の多少に依存するのである。一言でいえば、この商品を獲得するために払う犠牲の程度が商品の消費量の大小に影響を及ぼすからである。<sup>25</sup>

乗り越えたものの、強度効用という仮定をおくことに問題がないわけではない。レオンはもちろんそのことを承知している。

<sup>23</sup> レオン・ワルラス『純粋経済学要論—社会的富の理論』、75 ページ。

<sup>24</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』、8 ページ。

<sup>25</sup> 前掲書、76 ページ。

この分析は不完全であって、一見これ以上に深く推し進めることは不可能のように見える。その理由は、絶対的な強度効用は外延効用や所有量と異なり、時間的にも空間的にも直接のそして計量し得る関係を有しえないためにこれを把握することができないという事実による。しかしながら、この困難は克服できないものではない。今この関係が存在するものと仮定しよう。そうすれば、外延効用、強度効用および所有量のそれぞれが価格に及ぼす影響を正確にかつ数学的に説明することができるであろう。<sup>26</sup>

オーギュストの体系では、効用の可測性を仮定しなくても、ある財の交換価値の大小すなわち希少性の程度は、他の財との相対的価値として測りうるものであった。その変動を説明する要因は、欲望を持つ人間の数と供給量との関係であって、効用はその要因から排除されている。一方、レオンは希少性の程度を説明する要因として、効用により重要な役割を与えている。しかし、これによってオーギュストが採用した、効用は測れないという常識に反することになる。

もう一つ、重要な違いがある。オーギュストの体系では、効用は外界の事物と一人の人間の欲求との関係であって、社会を含意しないものであった。社会的富こそが経済学の真の対象と言ったオーギュストは、効用ではなく交換価値を重視する。第5節でも示すが、このことは次のように整理することができる。オーギュストが効用についての仮定を経ることなく、交換価値を考えていたということは、「個人内の原理」を一切体系に取り入れず、「個人間の原理」で体系を作り上げたということである。ここでいう個人内の原理、個人間の原理はそれぞれ、効用と希少性の概念にあたる。希少性の程度を数量化するために、レオンが効用可測性の仮定を採用したことは、経済学の体系に個人内の原理を含めたということになる。効用の可測性問題で、個人間の比較可能性<sup>27</sup>が議論となるのは、まさにこのことに関連している。

第3節では、オーギュストの体系が定性的な議論に終始して定量的な議論への移行が難しくなることをみてきたが、定性的な議論の範囲では体系に問題があるわけではない。希少性と所有という個人間の原理でオーギュストは巨視的に社会全体を考え、その衰退や発展を説明するのである。このことについては第4節でみていきたい。

---

<sup>26</sup> 前掲書、77 ページ。

<sup>27</sup> J.M.ヘンダーソン、R.E.クオント『現代経済学—価格分析の理論』、小宮隆太郎、兼光秀郎訳、創文社、1997年、316 ページ。

#### 第4節 進歩する社会における収入の特殊法則

これまでの節で「社会的富」の概念を検討してきた。それは希少で交換価値をもつものであり、また所有されうるものであった。量的に限られた有用なものは、人間の欲求を満たす力能を持つことから、われわれはその力能を求めて有用なものを占有しようとする。占有された有用なものは、その力能を行使してわれわれの欲求を満足させる。しかし、有用なものの持つ力能は、永久に存在し続けるわけではない。飲食物を例に取れば、飲食物としてわれわれの欲求を満足させるのはただ一度きりである。

そこで、オーギュストは有用なものの持つ力能について、もう一つ概念を導入する。それは「耐久性における制限」である。

われわれが享受する、富と称する財の大部分は量に制限があるばかりではない。財の中には耐久性に制限があるものが数多くある。それらは一般に使用によって壊される。すなわち消費される。いくつかのものは、ある程度ゆっくり消費される。他のものは急速に消費される。別のものはただちに消費される。<sup>28</sup>

われわれが有用なものを使用するとき、欲求が満たされると同時に有用なものに内在する力能がしだいに失われていく。力能の使用は「消費」と呼ばれる。消費とは力能の消尽にほかならず、オーギュストによれば消費のあり方が有用なものの属性を決めるという。すなわち、「耐久性における制限」の観点から、社会的富を分類するのである。

##### (1) 資本と収入

耐久性における制限があって一回の使用で力能が消えてしまうものがある一方で、ある程度その制限が解かれていて繰り返し使用しても力能が保存されるものもある。オーギュストは前者を「収入」、後者を「資本」と名付けている。「資本」と「収入」はさらに三つに分類されるのであるが、その分類はオーギュストの採用した階級観が反映されるものであるから後述することにして、ここでは「消費」に対置される「生産あるいは産業」について述べようと思う。

上述した「耐久性における制限」はもっぱら有用なもののもつ力能を消す、人間の消費という行為にかかわるものであった。しかし、人間の行為は有用なものの力能を消すことだけに限らない。人間は外界の事物に有用性をつけ加えることも可能である。こうした人

---

<sup>28</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』、35 ページ。

間の行為をオーギュストは「生産あるいは産業」と呼ぶ。第1節において、肉体的欲求に従属せざるをえない人間にはその代償として自然から「材料」が与えられているということを述べた。しかし自然の与える材料は、直接的にわれわれの欲求を満足させてはくれず、その多くは人為的な加工の末に欲求を満たす有用性を獲得する。この人為的な加工こそが産業であって、オーギュストはその本質を「変形」ととらえている。

産業は変化させる。人間は原料を作り出すことも破壊することもできない。人間ができるのは、つぎのことだけである。物質的要素を結び付けたり切り離したり、有用な形をもったものを生産したり消費したり、人間に満足または享樂をもたらすような仕組みを物に与えたり、取り除いたりすることがそれである。<sup>29</sup>

では、資本と収入の関係はどのようなものか。資本を使用することによって、そこから収入が生まれる。そのようにして生まれた収入は消費の元本となる。資本は使用によってある程度損なわれるのであるが、それを維持するための出費を行ない、あるいは収入をうまく運用することによって、資本は再生産され増加していく。

生産は富を増大させるものであるから、社会の価値観としては多産であることが望ましく、資本の遊休、またその消費もできる限りさけるべきであるとオーギュストは言う。そして社会的富を増大させる方法を二つ挙げている。それは節約によって収入を資本に変えることと、同一の資本からより多くの収入を引き出すことである。それぞれについてオーギュストは次のように述べている。

(1) 人は節約とその貯蓄の上手な運用によって裕福になりうる。すでに見たように、社会的富は資本と収入とから成る。資本は生産的な元本であり、収入は消費される元本である。資本は収入を生み、ついで収入は資本を生む。裕福になる基本的な方法は収入を資本化することである。収入の節約は資本を増加させ、より多大な資本は、より多大な収入を生む。ここに裕福になる基本的方法があり、交換によっては解決できない方法がある。

(2) だが、産業の本当の勝利は社会的富の増大にある。それは同一の資本からより多大な収入を引き出すこと、あるいは、よりわずかな資本から同一の収入を引き出すことである。このことが、まさに、われわれの安樂を次第に増加させるのである。これこそ、自然にたいし、またある意味で自然の吝嗇にたいし、われわれが大部分の時間を費やして戦いに挑み、また望まなければならない特質なのである。<sup>30</sup>

第1の、収入の資本化について付け加えておきたい。オーギュストは耐久性における制限

<sup>29</sup> 同上書、61 ページ。

<sup>30</sup> 同上書、65 ページ。



という観点から社会的富を二分したが、同じ観点で社会の豊かさを測ろうとする。

資本は、いわば間接的、媒介的効用を持つに過ぎず、他方、収入は直接的、非媒介的効用をもつ。欲求は収入を襲い、支配し、消費する。欲求は収入を追求する。人が資本を獲得するのは、まさに収入を得るためである。欲求〔する者〕にとって、資本を尊重し収入が戻ってくるのを辛抱強く待つのは喜ばしいことなのである。資本は、先見の明のある節度を弁えた精神によってのみ存続される。それは、いわば感性を犠牲にするところから生じる。非常に多くの場合、資本は貯蓄と儉約の賜物である。<sup>31</sup>

収入の節約によって資本の増加が見込めるが、欲求は収入を追求するため、その節約をするにはある程度の節度とゆとりが必要である。ゆとりのない「貧しい社会」では資本は往々にして消費され、収入の源泉が枯渇する。一方、「豊かな社会」では資本はうまく維持され、収入の消費だけにとどまる。それゆえ、収入の資本に対する割合を考えると、貧しい社会では収入の割合が高く、豊かな社会では収入の割合が低い。また同じ観点で時間的な変化を考えると、社会が衰退し、貧困化するにつれて収入の割合がしだいに高くなり、豊かになるにつれてしだいに低くなる。

## (2) 社会的富の三要素

さて、ここでオーギュストが採用した階級観について述べておきたい。それは、土地所有者、資本家、労働者という三階級である。これはリカードに代表される古典派の近代社会認識であって、第5節で示すように土地所有者が資本家、労働者と対立する。<sup>32</sup>

先に述べたように、オーギュストは階級観によっても社会的富を分類する。資本と収入で二分され、階級によって三分されるので分類はあわせて6つになる。その分類は、土地、人為的資本、個人的能力であって、それぞれが土地所有者、資本家、労働者に対応する。つまり、そのように分類された社会的富をそれぞれの階級が所有していることになる。以下では順に資本の属性についてみていく。

土地はまず、「自然的資本」である。これは自然によってもたらされた生産手段である。人間は土地を生み出しえない。それから、土地は消費されない資本である。土地の消費は基本的に地震や洪水などの大災害などによってしか起こりえない。

つぎに、人為的資本は、自然的資本に対置される。人間の生産活動は自然的資本に対する人為的改良であって、そこから人為的資本が生み出される。オーギュストは自然的資本を事物に限定せず、人間そのものも該当すると考える。人間に対する人為的改良は言うまで

<sup>31</sup> 同上書、42 ページ。

<sup>32</sup> 松嶋敦茂「オーギュスト・ワルラスの経済学」、64 ページ。

もなく教育のことである。人為的資本の例として、次のような例を挙げている。

自然的資本にたいして、しばしば人為的改良が加えられることがある。はっきりと囲まれ、十分に灌漑が行き届き、いくつかの建物が建てられ、あらゆる家畜や開拓に必要なあらゆる道具を備えた土地は、強力な生産手段を作るために自然と技術の力を合体させた一つの資本の例である。自然的能力を鍛えたり磨いたりした人間、多かれ少なかれ難しい一つの職人仕事を習得した人間、健全な思想や有益な知識によって知性を充実させた人間もまた、数多くの向上的要素をもった自然的能力にしばしば技術が加えられた生産手段の例である。<sup>33</sup>

最後に、個人的能力の属性は、自然的資本であり、「終身的な資本」である。生を享け、生き、そして死を迎えるということは、人間の手では変えようがない。われわれができることは生きている間に、与えられた自然的能力を鍛えていくことであって、これは人為的改良ととらえられる。こうして得られた能力は占有する人間から切り離すことができない。その意味で、個人的能力は「譲渡不可能な資本」である。また、ある用途以外に用いることができないという意味で、「拘束資本」である。

もう一方の収入について簡単にふれておく。土地所有者が持つ土地からの収入は、「借地料」である。資本家が持つ人為的資本からの収入は、「利子」である。そして、労働者が持つ個人的能力からの収入は、「賃金」である。まじめに生きる人間なら、財源はこのうちのどれかである。

### (3) 収入の変動法則

以上の分類をした上で、オーギュストはどのような結論を導くのであろうか。ここでは再び、社会の発展についての考察に戻ることにする。「進歩する社会」において、各収入がどのように変化するのか、またその理由は何かを知ることがオーギュストの関心事である。そして各収入の変動を説明するのが、第2節で準備してきた希少性の概念なのである。収入の変動を考えると、その「総額」と資本に対する「割合」を区別しなければならない。オーギュストは次のように言う。

収入と収入割合の上昇を混同してはならない。土地収入が社会の進歩の中で自然に高まると言うとき、私は、その収入の総額もしくは総計を考えて、そのように言っているのである。私はすでに収入の割合は進歩する社会では減少する傾向があることを明らかに

---

<sup>33</sup> 前掲書、38 ページ。

した。<sup>34</sup>

進歩する社会では、時間の経過につれて、収入の資本に対する割合が減っていく。しかし、その収入の総額は自然に高まるという。これは先に述べた、資本と収入との関係から言えることである。収入の消費を節約することで資本が増加していくことから、割合が低下しても、総額は増加しうる。

それから、オーギュストは進歩する社会では、人口がかなりの速度で増加すると考える。オーギュストの体系では、人口の増加は二値的な欲求をもった人間の数が増加することを意味する。したがって、人口の増加以外の条件を一定とすれば、ある有用なものに対する欲求の総量は増大することになり、その希少性の程度が上がる。希少性の程度の増加は価値の上昇につながる。すると、増大する欲求に対して供給が一定にとどまる「土地」を例にとれば、次のような結論となる。

繁栄する社会では、多かれ少なかれ、かなりの速度で人口が増加する。そして、単に人間の数が増加するばかりでなく、文明によって人々の中に新しい欲求が拡大する。この結果、フランスやイギリスのような国では、その領地は、しだいにより数多くの、また同時に、より多くの欲求をもった住民で覆われるようになる。人びとの数と多様な欲求が増大するにつれて、土地はますます多くの、そしてますます多様な生産物を日々供給しなければならなくなる。そこで、既述のように事物の価値が購買の総体と希少性もしくは欲求との間の比に由来することが正しいとすれば、発展する社会で土地の価値がたえず増大することは確実である。したがって、地代または土地の賃貸料も同じく増大し、その増大が借地料の高騰となって現れる。これが、土地の価値および土地収入の価値の法則である。<sup>35</sup>

この「土地の価値および土地収入の価値の法則」こそ、オーギュストの土地国有化論の論拠となるものである。土地国有化の主張については第5節で詳述する。この結論そのものから、進歩する社会では、土地所有者の境遇がしだいに安楽なものとなり、しだいに有利になる。そして、土地所有者の境遇について次のような疑問を投げかける。

もたらされうる唯一の帰結は、社会の内奥に不毛な寄生階級を存続させていることである。この階級は借地料によって養われ、その上、この階級は借地料の高騰にともなってまどろみながら裕福になる。しかも、生きるために働き、個人的能力を発揮するよう人類のすべてに義務づけられている法を侵して罰せられもしない。<sup>36</sup>

<sup>34</sup> 同上書、51 ページ。

<sup>35</sup> 同上書、51 ページ。

<sup>36</sup> 同上書、88 ページ。

なぜオーギュストは土地所有者にこのような批判的立場をとるのだろうか。その理由は当時のフランス社会の様子から、また共和主義勢力の代表的存在であり、のちに第三共和制を樹立することになるティエール（1797-1877）の主張から明確にすることができる。オーギュストは自らの論敵をティエールと定め、世論形成に絶大な影響をもっていた彼の所有論を批判するのである。

『社会的富の理論』が発表された19世紀半ばのフランスでは、産業革命の進行とともに労働者の困窮が生じた。大ブルジョワジーだけに投票権が認められた制限選挙と、フランス政府の外交政策の失敗に対する不満が高まり、二月革命が生じるのは1848年2月のことである。この二月革命後の政府には、産業資本家と有産階級を代表する共和主義勢力と労働者を中心とした社会主義勢力が参加した。<sup>37</sup>

オーギュストが批判の対象としたティエールの著書、『所有について』が出版されたのは1848年9月のことである。<sup>38</sup>この著作は二月革命期の社会主義者が行なった所有批判に対して、私有制度を擁護する内容を持っていた。ティエールの私有制度はその論拠を各人の能力にもとづく労働に置く。各人の能力は不平等であるから、現存の所有制度にある不平等も不当なものではないとティエールは立論するのである。

オーギュストの体系では、労働は交換価値の唯一の源泉ではない。人為的改良による価値の付加として労働に一定の役割を与えつつ、有用性と量的制限という概念によって交換価値をより包括的に説明する。それゆえ、労働以外の土地の内在的価値をも抽出することができるのである。ティエールが土地の価値を、「地表は労働にとって必要な中枢的場所であり、そこで次第に蓄積される労働によって、その土地の価値はほとんど形成される」と説明するのに対し、オーギュストは次のように批判する。

否、絶対に否、土地の価格が地表に蓄積される労働に由来するなどということは、まったくない（…）それどころか、そこでは労働は、たちまち消費されてしまう（…）土地はその有用性と希少性から生み出された価値をそのまま保持していた（…）[しかし]その価値は、今やフランスの人口が増大し、また文明そのものが進展するにつれて高騰しているのである。<sup>39</sup>

農業に従事する者は、労働に対する契約価格である賃金を受け取る労働者であり、オーギュストの階級観では、土地からの収入である借地料を得る土地所有者とは区別されねばならない。この観点からすると、ティエールの主張に一貫性がないことが指摘できる。土地所有の論拠を労働に置くとするならば、労働によらない収入を得ている土地所有者の存

<sup>37</sup> 木下康彦、木村靖二、吉田寅編『詳説世界史研究』、山川出版社、1998年、350ページ。

<sup>38</sup> 「解題」、101ページ。

<sup>39</sup> 「解題」、104ページ。

在はどのように説明されるのか、ティエールは土地所有者を労働者に仕立て上げることで自らの主張のつじつまを合わせているとオーギュストは言うのである。

さて、残り二つの収入の法則についてみていこう。人為的資本から収入についても同じように、希少性の概念によってその変動が説明される。では、人為的資本と増大する欲求の総量との関係はどのようなものであろうか。

人為的資本は繁栄する社会では、たえず増大する。ここで問題にしている資本は労働と節約の成果である。ところで、常に成長する文明、そして技能と知識の進歩のおかげで、労働はより敏速になり、より生産的になる。節約はより容易になり、より魅力的になる。

(…)ところで、労働の困難さそのもの、以外に、資本の発展を押しとどめるものは何もない。これを除けば人為的資本は限りなく増加しうるし、また事実、この資本は平穩を享受し、お互いにその恩恵を大切にす勤勉な国民のなかで、絶えず増加する。<sup>40</sup>

このことから、オーギュストは人口の増大よりも、資本の増大のほうが速く進むという。したがって、人為的資本の希少性の程度はしだいに減少していく。これは人為的資本の価値がしだいに失われていくということであって、人為的資本からの収入である利子の総額が減少する。さらに、進歩する社会では資本に対する収入の割合も減少するのであった。それゆえ、収入の割合である利子率もまた低下していく。人為的資本の収入は、二つの理由で減少するのである。言うまでもなく、人為的資本の所有者である資本家の境遇はしだいに苦しいものとなる。

進歩する社会では、資本家は次第に苦境に陥り、ますます不利になるということである。資本家の生活、あるいはその生活の一部の根拠となる収入は、二重の理由によって減少する。資本家にとって無為は次第に高いものにつくことになる。彼らは自らの立場を守り、その欲求の高さに応じた収入を維持するため労働と節約を恒常的に求めざるをえなくなる。<sup>41</sup>

では、個人的能力からの収入はどうであろうか。上記のように、人間の行為は消費と生産に分けられ、人間は消費者としての役割と、生産者としての役割を担う。オーギュストは人口の増大がある場合、経験的に消費者と生産者が同じ割合で増大するという。したがって、労働はあらゆる時代を通じてほぼ一様の価値をもつ。

土地収入が絶えず上昇し、利潤がこれと逆に減少するのにたいして、労働は、いわば無変化の状態にとどまる。労働というのは個人的能力の収入のことである。労働は、それ

<sup>40</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』、54 ページ。

<sup>41</sup> 同上書、55 ページ。

自体としては、土地収入に見られる騰貴も資本を特徴づける価値下落もしにくい。労働とは人間能力の日々の行使である。労働とは自然がわれわれ各人に分かち与えた産業的素質がもたらす年々、月々、日々の収入のことである。労働とは人間のことである。<sup>42</sup>

人間が生産者であると同時に消費者であるということから、個人的能力の希少性の程度は一定にとどまる。この原則によれば、個人的資本の収入である賃金は一定であって、借地料の変動にも、利子の変動にも従うものではない。

したがって、ここに、個人的能力がその価値を保ち、それによって土地からも人為的資本からも区別される十分な理由がある。ここに、労働の価値があらゆる時代を通じてほとんど同じ状態を保つこと、また労働とその報酬の表現である賃金が借地料の上昇にも利子のこれと逆の動きにも従わないことの十分な理由がある。<sup>43</sup>

以上述べてきた各収入の変動をまとめると次のようになる。進歩する社会では人口が増加する。人口の増加とともに、社会的富に対する多様な欲求が生じる。巨視的に欲求の総量を考えると、増大する欲求に対して、土地の供給は一定にとどまる。人為的資本への欲求は増加するものの、供給の増加がそれを上回る。そして、個人的能力に対する欲求の増加は、同じように増大する人口（供給）によって相殺される。それゆえ、オーギュストの希少性の概念によれば、土地の価値が増大する一方、人為的資本の価値は減少する。個人的能力の価値は変化しない。

---

<sup>42</sup> 同上書、56 ページ。

<sup>43</sup> 同上書、57 ページ。

## 第5節 オーギュスト・ワルラスの所有論

オーギュスト・ワルラスの『社会的富の理論』の到達点は、独自の所有論である土地国有化の主張にある。この所有論は前書きで触れたように、未刊に終わるのであるが、そこでは今まで登場してきた経済学の概念や法則が土地国有化の主張に向けて収斂していく。もともと、オーギュストの研究は所有論からはじまった。しかし、既存の所有の理論に満足できず、よりいっそうの正確さを求めて、経済学の研究に入っていたのである。<sup>44</sup>経済学はオーギュストにとって「社会的富にかんする科学」であって、所有論にはその裏づけが不可欠であると考えていた。所有論と経済学を研究した結果、オーギュストがどのような共通性を見出したのかについては第1節でふれた通りである。外界の事物に量的な制限が加わることによって、事物は効用の観点から見れば希少なものとなり、占有の観点から見れば所有されるものになるのであった。そして、それぞれの観点を方法論としてもつ、経済学と所有の理論には次のような役割が与えられているという。

経済学は一つの自然科学であり、所有の問題は道德の領域に属している。経済学が原理をもつとしたら、自然法も原理をもつ。そして、これらの原理はその重要性和尊厳性にかけては他の原理に引けをとることはない。諸科学は相互に援助しあわなければならない。だが、一方が他方を吸収したりすることは、けっしてあってはならない。したがって、所有の問題を解決することは、まさに自然権に特有なことなのである。経済学について考えてみると、それは、この同じ問題の解決に光を投じ、その解決にその諸原理を出動させる権利をもつといえる。<sup>45</sup>

この節では、オーギュストの土地国有論を検討した後、本稿のまとめとして道德の領域に属するという所有の問題と、社会的富の科学である経済学の関係を考察してみたい。

### (1) 土地国有化論について

所有には二つの形態がある。自分のものとして所有される「私有」と、共同のものとして所有される「公有」である。オーギュストによれば、所有がいずれの形態をとるかは、ものの本性、使われ方、ものがもたらす用益の性質によるという。

私有に限られるものは、その力能の満たす欲求が個人的でしかないものである。たとえば、一片のパンを二人の人間が消費する場合を考えてみよう。一片のパンがもつ力能が同時に

<sup>44</sup> 「解題」、94 ページ。

<sup>45</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』、72 ページ。

二人の欲求を満たすことはありえず、二人は折り合いをつけて一片のパンを分配するはずである。より一般的にいえば、第4節でみてきた「収入」がこれにあたる。収入は耐久性における制限があって、一回の使用で消費されてしまう。一回の使用で力能が消えてしまうものは、二人以上の人間の欲求を満たすことができない。消費は究極的にはかならず個人的なものであるから、使用に先立って共有が解消されていなければならないのである。それゆえ、所有の形態は必然的に私有となる。同じように耐久性の制限という観点で考えるならば、繰り返して使用可能な「資本」は、私有でも公有でもありうる。

では、公有に限られるものは、どのようなものか。さらに同じ観点で考えるなら、消費されない資本である土地が必然的に公有の対象となる。実際には、オーギュストが引用した当時のフランス民法典によれば、次のようなものが公有（国有）の対象となっている。

国が管理する道路や街道、街路、また、航行できる、または筏が流せる河川、河岸や前浜、港湾、投錨地、つまり一般的にいて、私有が許されないフランス領土のすべての部分が行政財産の従物と見なされる。

城門や城壁、壕、戦場の防禦物、要塞も同じく行政財産の一部をなしている。そしてこれらが仮に正当な手続きを踏んで譲渡されたものでなく、あるいは、その所有権が時効によって取得されたものでなくても、それらは国家に属しているのである。（民法538,540,541条）。<sup>46</sup>

以上は有用なものの属性から決まる所有の形態である。土地国有化論はオーギュストによると、ものの本性だけでなく、正義や便宜さからも導かれるという。次に示す部分が土地国有化論の骨子である。

土地は国家に属し、労働は個人に属する。これこそ、所有問題において、すべての権利を両立させ、あらゆる合法的利益をとる方法に関して私が提起した問題に対する解答である。

土地は国家に属する。耕地はすべての市民の共同所有を形づくる。土地からの収入または借地料は公共的収入を構成する。今日フランスの耕地から生み出される20億フランの借地料こそ、共和国の正真正銘の年々の収入である。<sup>47</sup>

ここで使われている「国家」という言葉に留意する必要がある。国家とはすべての者のことであり、すべての市民の集合であるとオーギュストは言う。国家と個人は対立するものではなく、集合とその要素という区別でしかない。国家が所有する有用なものは誰のものでもないがゆえに、すべての市民のものという性格をもつことになる。

<sup>46</sup> 同上書、77 ページ。

<sup>47</sup> 同上書、84 ページ。



ところで、土地はだれのものでもない。あるいは、もっとはっきり言うと、それはすべての人のものである。この原理はあらゆる政論家が主張しているところのものである。だから、誰かの土地というものは、当然、ありえないことなのである。個人は土地に対して暫定的な、一代限りの権利しかもちえない。だれであれ、それ以上の権利もそれ以下の権利ももつことはできない。この一代限りの権利、この用益権を各人は国家に委ねているのである。またこれらの権利を同胞の権利と共有しているのである。この結果、こうした協同組織に、公共的費用、共同体のすべての利害にかかわる費用を補助する資力が備わることになる。<sup>48</sup>

ここにある一代限りの土地の用益権が国家から与えられる一方、その収入である借地料を国家に納めるということが土地国有化論の具体的な内容である。さらに、オーギュストは国家の税収を借地料に一本化し、資本と労働に課されている租税負担を軽減することを構想していた。こうした主張の根拠となるのが、第4節で述べた進歩する社会における「土地の価値および土地収入の価値の法則」である。つまり、何もしなくてもしだいに安楽になる土地所有者から、資本家と労働者に所得の移転を行い、社会的な正義を実現しようとするのである。

土地以外の二つの資本、すなわち、人為的資本と個人的能力については次のように言う。

労働と資本は共同所有の対象にはなりえないし、また、対象にすべきではない。あるいは、それらは、少なくとも自由な同意のもとでのみ、また、その結果としてのみ共同所有の対象となりうる。だが、法はそうする義務をかれらに与えることはできない。だから、このことから、共同にもとづくあらゆる制度、そして同情または犠牲的精神に訴えるあらゆる制度の欠陥が指摘できる。共同や同情は任意のものである。したがって、それはあるかも知れないし、ないかも知れない。<sup>49</sup>

つまり、資本家と労働者は対立するものでも、法の強制のもとで共同するものでもなく、任意の契約によって共同しうるという関係にある。

オーギュストは土地の公有を主張する一方で、各人の努力によって生み出される資本と労働には私有を認める。ここから達成される正義は端的に、「条件の平等と地位の不平等」と定式化される。<sup>50</sup>一代限りの土地の使用は条件の平等を保障するものであり、各人の努力の程度によって生じる結果的な不平等は是認される。

---

<sup>48</sup> 同上書、87 ページ。

<sup>49</sup> 同上書、86 ページ。

<sup>50</sup> 「解題」、106 ページ。

## (2) 経済学と道德の関係

土地国有化という独自の主張が生み出される過程でオーギュストは、所有の理論と富の理論との間に深い関係があると確信するに至ったという。<sup>51</sup>以下ではオーギュストが抱いた確信とはいかなるものであったかを考察していく。

オーギュストは「所有」を次のように定義している。

所有とは、他人の権利を侵害することなく、その所有によって得られる利益を求めて、あるものを享受、活用、消費し、その[所有者の]意図にしたがって、それを自由に処分する権利のことである。<sup>52</sup>

ここで、第1節で考察してきた人間と外界の事物との関係を振り返ってみる。人間は感覚的存在としてさまざまな欲求に従属せざるをえない。その欲求を満たすべく、外界の事物がもつ力能を当て込んでそれを求め、消費する。占有の欲望が消費の欲望に先立つ。有用なものの力能を享受するためには、それを前もって占有していなければならない。ここまでは一人の人間と事物との関係であって、もう一人のあるいはそれ以上の人間を必要としない。

しかし、有用なものに量的制限が加わることによって、その事物が占有していない人間からも求められうる、交換価値をもつ希少なものとなるのであった。ここにおいて、社会的な含意が加わり、その事物は希少性の概念であるところの「社会的富」となった。第3節の終わりで述べた分類を踏まえると、オーギュスト・ワルラスの希少性概念は「個人間の原理」によって構成されており、第4節で示したように社会の巨視的で動的な分析が可能となった。

占有の観点では、希少性の概念は「所有」の概念となる。希少性の概念が「個人間の原理」を示すものなら、所有の概念もまた、「個人間の原理」を示すはずである。以下の文章を検討してみよう。

次のように言うと誤りになる。所有は人格とものとの間の関係であって、人格は権利の主体であり、ものは権利の対象である、と。ものは権利の対象ではない。少なくとも、ものは権利の直接的、無媒介の対象ではない。ものは権利の間接的对象でしかない。権利とは道德的關係である。道德的關係は二つの道德的存在、二つの人格の間でのみ成立しうる。権利の主体たる人格が有する権利を尊重する義務を負う[二つの]人格的存在、

<sup>51</sup> 「解題」、94 ページ。

<sup>52</sup> オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』、75 ページ。

これこそが所有権の真の対象なのである。所有はものを人格と結びつけるのではない。それは人格どうしを結びつけるのである。<sup>53</sup>

所有権の真の対象は二つの人格的存在であって、ものは権利の対象ではないとオーギュストは言う。ではなぜ、人格ともとの関係ではないのだろうか。そもそも、所有権は人格ともとの関係を規定するものではなかったか。

その理由は、オーギュストが所有の理論をもって道徳的関係の構築を目指していたことによる。所有の理論が単に一つの人格ともとの関係で閉じるのであれば、それは占有を正当化する単なる手段でしかない。第4節でみてきた労働者の困窮への解決策、それから大ブルジョワジー中心の私有制度への全面的批判を提示しようとしていたオーギュストにとって、所有の理論は社会が守るべき新たな価値観を示すものでなければならなかった。

こうして、所有権が人格と人格を結びつけるものであると結論するに至る。ある人格ともとの関係がそれ自体で閉じることなく、ものを媒介として、もう1つの人格との関係をつくっている。これがオーギュストの言うところの道徳的関係であるが、この関係を成立させるのは「個人間の原理」である。つまり、この道徳的関係は希少性概念のところでみえてきた、希少なものを媒介とした社会的関係と一致する。それは量的制限を設けることによって外界の事物と個人との二項関係から、欲求を満たすことができない人間の存在を想起させるものであった。

オーギュスト・ワルラスの社会的富の理論は、欲求の強度という人間の曖昧で測りえないものを仮定することなく、ありのままの社会を測定可能な希少性の概念で統一的に説明し、しかも希少なものを媒介として人格と人格との関係、すなわち道徳的関係を描きえている。このようにして社会的富の理論である経済学は、道徳の領域と関係するのである。

---

<sup>53</sup> 同上書、76 ページ。

## 参考文献

オーギュスト・ワルラス『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約』佐藤茂行訳、北海道大学経済学部、1995年。

木下康彦、木村靖二、吉田寅編『詳説世界史研究』、山川出版社、1998年。

J.M.ヘンダーソン、R.E.クォント『現代経済学—価格分析の理論』、小宮隆太郎、兼光秀郎訳、創文社、1997年。

都留重人編『岩波経済学小事典』第3版、岩波書店、1999年。

松嶋敦茂「オーギュスト・ワルラスの経済学」『彦根論叢』滋賀大学経済学部、1972年、155。

御崎加代子『ワルラスの経済思想』名古屋大学出版会、1998年。

レオン・ワルラス『純粋経済学要論—社会的富の理論』久武雅夫訳、岩波書店、1983年。